2025年7月号 VOL.87

軽音楽部マガジン

発行：特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会　配布：全国 2,140 校の高等学校軽音楽部

第 11 回 高等学校軽音楽コンテスト中部大会より

軽音楽部のコンテストの在り方を考える

軽音楽部にエンターテイメント性はどこまで必要か
「他者の批評ができる力」を持つことが成長のカギ
軽音楽部における夏の大会を振り返って

軽音楽部マガジン
バックナンバー

ヘッドホンで演奏が楽しめる スピーカー、エフェクト内蔵の SMART なギター

アンプへの接続はもちろん、ヘッドフォン端子やスピーカーを内蔵。軽くて丈夫なカーボンファイバーを本体に採用し、多彩な音作りを実現するエフェクターやチューナー、メトロノーム、ルーパーを搭載。いつでもどこでも「弾きたい！」と思った瞬間に演奏できる、スマートなギターです。

1. スピーカー搭載で、面倒な準備をスキップ
2. ヘッドフォンを接続すれば、夜間の演奏も◎
3. ワンタッチでエフェクトが切り替わる
4. 豊富なエフェクト達を自由にカスタマイズ
5. 演奏をサポートしてくれる様々な便利機能
6. USB Type-C 対応でギターの録音が簡単に
7. 高温多湿に強く、軽量なカーボン素材
8. 丈夫で使いやすい高機能なギグバッグ付属

定価：77,000 円（税込）
高機能ギグバッグ付属

nebulaguitar.jp

軽音楽部マガジン

令和７年７月号 VOL.87

■軽音楽部マガジン VOL.87　■創刊：平成 25 年 12 月 18 日（水）■第 14 巻 7 号通巻 87 号
■監修・発行／特定非営利活動法人（NPO 法人）全国学校軽音楽部協会　JASLMC（Japan Association of School Light Music Club）
〒 224-0003 横浜市都筑区中川中央 1-37-6-405　TEL：045-913-0901　FAX：045-913-1900　E-Mail：info@keionkyo.org
■企画・編集／株式会社ミュージックネットワーク

部活動を考える　軽音楽部のコンテストの在り方を考える……4
特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 理事長　三谷佳之

部活動を考える　軽音楽部にエンターテイメント性はどこまで必要か……6
特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 副理事長　辻　伸介

軽音楽部の可能性　「他者の批評ができる力」を持つことが成長のカギ……8
特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 副理事長　辻　伸介

軽音楽部における夏の大会を振り返って……12

音楽／エンタメ業界の仕事 2025

ライブ PA
日本工学院専門学校／日本工学院八王子専門学校……16

映像の仕事（ライブ撮影）
専門学校大阪ビジュアルアーツ・アカデミー……18

From Chief-In-Editor

軽音楽部の「今」と「これから」

近年、学校における軽音楽部の活動は目覚ましい発展を遂げており、技術レベルの向上はもちろんのこと、オリジナル楽曲の制作やライブ演奏など、その活動内容は多岐にわたり、多くの生徒たちにとってかけがえのない存在となっています。しかしながら、その成長の陰で、軽音楽部を取り巻く環境には、いくつかの課題が浮上してきているのも事実です。学校教育の一環である「部活動」としての側面と、音楽の「エンターテイメント」としての側面が時に曖昧になり、その境界線で戸惑う声も聞かれるようになりました。

例えば、バンド経験が豊富で、音楽業界のトレンドにも詳しい先生と、部活動はあくまでも教育の一環であるという視点を重視する先生との間で、指導方針や活動内容に対する「温度差」が生じるケースがあります。どちらの視点も生徒たちの成長にとって不可欠な要素であることは間違いありませんが、この温度差が部活動運営に影響を与えることも少なくありません。

さらに、教員の働き方改革の一環として進められている「部活動の地域移行」も軽音楽部界隈に大きな変化をもたらしています。地域との連携が強化されることで、より専門的な指導や新たな活動の場が生まれる可能性を秘めている一方で、これまで学校が担ってきた役割の一部が移行することで、従来の軽音楽部のあり方が大きく変わる可能性も指摘されています。

このような状況の中、私たち全国学校軽音楽部協会では、音楽業界と教育現場、双方の視点から軽音楽部を取り巻く環境を公平に俯瞰し、今後の軽音楽部のあり方を共に考えていきたいと考えています。生徒たちが安心して音楽活動に打ち込める環境をどのように整備していくか。教育的な側面とエンターテイメントとしての魅力をどのように両立させていくか。そして、変化する社会の中で軽音楽部がどのように地域や社会に貢献できるか。私たちは、これらの問いに対して、具体的な提案や問題提起を積極的に行っていく所存です。部活動指導ガイドラインの策定支援、地域と連携したイベントの企画、生徒たちの才能を発掘・育成する機会の創出など、多角的なアプローチで軽音楽部活動を支援していきたいと考えています。

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 理事長　三谷佳之

全国約4,800校の高校に軽音楽部を！

※現在、軽音楽部があるのは2,140校です（令和7年6月1日当協会調べ）

軽音楽部の諸活動を通して若者の成長を応援しています

1 軽音楽部の正しい理解を

軽音楽部は部活動としての歴史が浅く、ポピュラーミュージックやバンドへの偏見も一部に残っており、正しく理解されていないのが実状です。STEAM教育の一端として、軽音楽を通した部活動の有意義さや得られるものなどを学校内外へ広めていきます。

2 軽音楽部の全国普及に向けて

学校教育の一環である部活動のひとつとして、軽音楽部が全国の学校に設立されることを目指し、日々の練習や演奏会のサポート、楽器や機材の相談、各種クリニックや大会の開催など、諸活動をバックアップしていきます。

3 新しい活動の提案と支援

デジタル化、IoT化による現代的な楽器や機材、DTMの普及による新しい軽音楽のスタイルなど、今と未来に見合った活動を各業界とのパイプ役として軽音楽部に提案、支援しつつ、軽音楽のポップカルチャーとしての発展を目指します。

当協会の理念や活動内容にご賛同いただける方々のご寄付をお待ちしております
詳しくはこちらまで…

特別賛助会員の皆様（敬称略／順不同）

株式会社ミュージックネットワーク
公益財団法人かけはし芸術文化振興財団
一般社団法人サトヤマカイギ
名古屋芸術大学
宝塚大学
日本工学院専門学校／日本工学院八王子専門学校
専門学校東京ビジュアルアーツ・アカデミー
専門学校名古屋ビジュアルアーツ・アカデミー
専門学校大阪ビジュアルアーツ・アカデミー
名古屋スクールオブミュージック＆ダンス専門学校
ギブソン・ブランズ・ジャパン株式会社
フェンダーミュージック株式会社
有限会社エムエージー
株式会社トップトラベルサービス
株式会社福々家（モアリゾート、ホテル寺尾温泉）
有限会社ユイネ（音楽ロッヂ ゆうげん荘）
株式会社オーティーズ
株式会社サウンドハウス
株式会社池部楽器店

特定非営利活動法人
全国学校軽音楽部協会
keionkyo.org

全国学校軽音楽部協会

部活動を考える

目指すは勝利ではなく、共創。教育的視点から考える軽音楽コンテストの意義

軽音楽部のコンテストの在り方を考える

三谷佳之
特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
理事長

学校における部活動は、決してその分野のプロを養成する場ではありません。ましてや、プロへの登竜門でもないでしょう。軽音楽という文化に触れることは、生徒一人ひとりの豊かな感性を育み、かけがえのない仲間との出会いをもたらしてくれます。しかし、その音楽活動に「優劣」をつけることには、教育者として深く向き合うべき課題があると考えています。もちろん、コンテストという競争の場は、生徒たちが技術や表現力を高める上で、具体的で明確な目標となりうることも理解しています。しかし、決して演奏技術の巧拙を競うことだけが目的ではありません。すべての生徒が自分らしく輝き、音楽を通して人間的に成長していくための、学びの場であることを強く願っています。

優劣をつけない、感性を磨く場としてのコンテスト

音楽や芸術といった文化活動に優劣をつけること自体がナンセンスだと、私たちは考えています。音楽は、聴く人の心に響き、感情を揺さぶるものであり、その感性は十人十色、決して数値や点数で測れるものではありません。たとえば、あるバンドの演奏を聴いて涙を流す人がいる一方で、別のバンドの演奏に熱狂する人がいる。それはどちらの演奏が優れているか、ということではなく、聴く人の心にどう響いたか、ということに他なりません。コンテストという形式を取る以上、どうしても順位や点数がつきまといますが、これはあくまで生徒たちが音楽と向き合うための一つのきっかけに過ぎません。最も大切なのは、生徒たちが自分たちの「センス」を信じ、それを表現する喜びを知ることです。他者と比較するのではなく、自分自身の感性と向き合い、それを磨き上げていく。このコンテストが、そのような感性を育む場となることを願っています。

この「感性である音楽に優劣をつけるコンテスト」という狭間で、私たちも大いに悩みました。そして、その答えを探すため、吹奏楽部や合唱部といった他の音楽系部活動の団体に相談に伺いました。それぞれの部活動には、数十年にもわたる長い歴史があり、その中でコンクールや発表会のあり方について、幾度となく紆余曲折や試行錯誤を繰り返してきたそうです。今の彼らの活動の形は、そうした長い歴史の中で培われてきた知恵と努力の結晶であり、私たち軽音楽部が今直面している悩みも、決して軽音楽部特有のものではないのだと気付かされました。先輩方が乗り越えてきた壁を前に、私たちも安易に諦めることなく、前に進むことの大切さを改めて痛感しました。このコンテストのあり方も、未来の軽音楽部員が誇れるような、確固たる信念に基づいた形に収束していくよう、一歩ずつ進んでいきたいと考えています。

音楽の技術的な側面ももちろん重要ですが、それ以上に、どういう想いでその曲を演奏するのか、聴く人に何を伝えたいのか、といった「表現力」が大切です。たとえば、演奏技術が未熟でも、聴く人の心に深く響くような熱いパフォーマンスを見せるバンドもいれば、技術的に完璧でも、聴く人の心に何も残らない演奏もあります。私たちのコンテストでは、このような「感性」や「表現力」を重視して評価したいと考えています。順位付けは結果として存在しますが、それはあくまで審査員というフィルターを通した「一意見」に過ぎません。参加したすべてのバンドが、それぞれの個性を存分に発揮し、自分たちだけの音楽を追求する。その過程こそが、何よりも尊い教育活動であると私たちは信じています。

生徒自身が創り上げる、主体性を持ったイベントへ

この軽音楽コンテストは、生徒たちが自らの手で創り上げるイベントを目指します。大人の敷いたレールの上をただ走るだけのイベントは、もはや時代遅れです。正解のない現代社会を生きる私たちには、自ら考え、行動し、新しい価値を創造する力が求められます。部活動も、例外ではありません。自分たちがどんなイベントをやりたいのか、どんなコンテストにしたいのか。生徒同士でアイデアを出し合い、仲間と協力して、それを形にしていく。その過程で、コミュニケーション能力や課題解決能力、そして何より、物事を創り出す喜びを学ぶことができます。バンドの楽曲制作や演奏活動だけでなく、コンテストやイベント自体も、生徒たちの手で創り上げるべきだと考えています。

私たちは、このコンテストを「ただ演奏するだけの場」にしたくありません。生徒たちには、企画運営にも積極的に関わってほしいと思っています。たとえば、コンテストのテーマやルールを考えたり、審査基準を話し合ったり、広報活動を行ったり。これらの経験は、社会に出てからも必ず役に立つスキルとなるはずです。なぜなら、これからの社会は、誰かが決めたルールに従うだけでなく、自らルールを創り出す力が求められるからです。軽音楽部という枠を超えて、イベントを創り上げるという経験を通して、生徒たちには「自分たちが社会を創るんだ」という当事者意識を持ってほしいのです。このコンテストが、生徒たちの創造性を引き出し、未来を切り拓く力を育む場となることを心から願っています。

コーチングとリード、教員に求められる役割

教員や顧問は、生徒を「教える」だけの存在ではありません。むしろ、生徒たちが自ら学び、成長していくための環境を「コーチング」し、「リード」していくことが、私たちの大きな仕事だと考えています。一方的に知識や技術を教え込むのではなく、生徒一人ひとりの可能性を引き出し、彼らが自らの力で問題を解決できるよう導くこと。それが、これからの時代に求められる教育のあり方ではないでしょうか。軽音楽部活動においても、顧問はバンドの演奏技術を教え込むのではなく、生徒たちが自ら表現したい音楽を見つけ、それを形にするための伴走者となるべきです。

具体的には、生徒たちが直面する課題に対して、すぐに答えを教えるのではなく、「どうすれば解決できると思う?」と問いかけ、自ら考える機会を与えること。そして、生徒たちのアイデアや意見を尊重し、彼らの主体的な活動を後押しすること。これが「コーチング」です。また、安全管理や予算管理など、生徒たちだけでは解決が難しい部分をサポートし、活動全体を円滑に進めるための「リード」も、教員の大切な役割です。生徒たちは、自分たちだけで解決できない問題に直面することで、壁を乗り越える力を身につけていきます。私たちは、その壁を乗り越えるための「ヒント」を与え、彼らが自らの力で成功体験を積めるように導く。このコンテストは、まさに生徒たちが自ら考え、行動し、成長していくための学びの場であり、私たちはそのガイド役に徹したいと思っています。

出場するだけが学びではない、全員が審査員であること

軽音楽コンテストは、出場するバンドだけのものではありません。出演しない生徒たちにとっても、貴重な学びの場となることを目指しています。顧問や教員は、出演しない生徒たちにも、コンテストを「学びの場」として提供することが重要な役割です。ただ傍観するのではなく、出場校のバンド演奏を「生」で見て、彼らが何を感じ、何を学べるか。それを引き出すことが大切です。

私たちは、コンテスト当日、出場しない生徒たちにも「審査員」としての役割を担ってほしいと考えています。具体的には、それぞれのバンドの演奏を聴いて、良かった点、改善できる点などを自分なりに評価し、点数をつけてほしいのです。そして、その評価を仲間と話し合い、自分たちの意見をまとめてほしい。さらに、プロの審査員が下した結果と、自分たちの審査結果を比較し、なぜそのような違いが生じたのかを考察する。このような一連の活動は、生徒たちの音楽に対する理解を深め、多角的な視点を養う貴重な機会となります。

「映像は大会ごとに後日、YouTubeで公開します」というのも、この学びを深めるための重要な取り組みです。ライブで感じた興奮や感動を、後日映像で見返すことで、冷静に演奏を分析し、自分たちの評価の根拠を再確認することができます。また、自分たちのバンド活動に活かせるヒントを見つけることもできるでしょう。このコンテストは、単なる順位付けのイベントではなく、出場する生徒も、応援する生徒も、全員が学びを深めるための「教育プログラム」でありたい。すべての生徒が、音楽を通して成長していくことを願ってやみません。

部活動を考える

ロックやバンドは「音楽性」よりも「エンターテインメント性」が重視されがちな理由を考察

軽音楽部にエンターテイメント性はどこまで必要か

辻　伸介
特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
副理事長

ロックやバンドという演奏形態は、本来1つの音楽ジャンルでありながら、しばしば音楽そのもの以上に「エンターテインメント性」が強調され、消費されてきました。特に、日本ではその傾向が顕著で、単なる楽曲の魅力を超えて、キャラクター、物語、演出、ファン体験などを含む「総合パッケージ」として位置づけられます。また、その傾向は軽音楽部という部活動にも波及し、ロックというポピュラーミュージックやバンド活動から得られる学びの中の、一側面にしか注目が集まっていないと感じることもあります。なぜ、日本の音楽産業や文化、教育はロック、バンドをそうした形で受容・展開してきたのでしょうか。

総合芸能としての文化的土壌

日本の大衆音楽は、古くから「芸能パッケージ」として発展してきました。演歌や歌謡曲は、歌詞やメロディだけでなく、衣装、MC、人生ドラマといった要素を含めた総合的な商品として成立しています。日本独自のアイドル文化においては、ダンス、トーク、握手会、メディア出演、映像コンテンツなど、多角的なエンターテインメント性によって多くのファンを獲得してきました。

こうした土壌の中で、欧米由来のロックやバンド文化も日本においては視覚的・演出的な要素が重視されるようになります。元々、ポピュラーミュージックは映画やテレビなどと共に成長してきた背景がありますが、戦後の日本では特にロックが「見せる音楽」「共有するもの」として商業化され、現在のライブシーンでは照明、映像、衣装、世界観、MC、ファン対応といった演出面が大きな価値を持っています。

私がかつて勤めていた音楽専門学校で、学生に「音楽のどこに惹かれて楽器やバンドを始めたか」というアンケートを行った際、演奏技術やサウンドといった音楽的要素と並び、「かっこよさ」「カリスマ性」などのビジュアル的・偶像的な魅力に惹かれたという回答も多く見られました。つまり、ポピュラーミュージックは音楽性とスター性の両方によって成り立っているのだということです。実際、私自身も音楽への入口は後者の要素によるものでした。そして今では、ロックが資本主義社会におけるエンターテインメント産業の一部であることを実感しています。

生産側と消費者側の関わり方

日本の音楽産業は、昭和の頃からテレビやラジオ、雑誌、現代ではSNSなどを通じてスターを生み出す仕組みを発展させてきました。バンドも音楽性だけではなく、不良や反逆、幻想的な世界観など、物語やキャラクター性を伴った「商品」として演出されることが多く、メディア戦略ではわかりやすいイメージやストーリーが重視されがちです。

また、聴衆側も「ライブに行く」「推しを応援する」「限定グッズを集める」といった体験型・参加型の消費スタイルを好み、演者は楽曲よりも演出、話術、キャラクター性など、総合的な魅力で支持を得る傾向があります。音楽は、聴くものというより応援するものへと変化しているのです。

さらに、フェス文化の浸透も影響を与えています。音楽イベントが皆で盛り上がるアクティビティとして定着し、演者はMCやSNS拡散を意識した魅せ方を磨くことが重視されます。その結果、音楽の革新性や深さよりも、話題性や盛り上がりの演出が優先される傾向が強まっています。

日本の音楽教育の現状と課題

一方で、日本の学校教育において、ロックやバンドといったポピュラーミュージックは、いまだ「教育」とは結びつきにくいと見なされがちです。これには、ポピュラーミュージックが持つ自由で娯楽的なイメージが、クラシック音楽中心の教育観と対立する構造があると考えられます。実際、音楽教育全体としてクラシック偏重の傾向が強く、近年の教科書においてはポピュラーミュージックへの一定の歩み寄りが見られるものの、コード理論や作曲法、グルーヴ感などの文化的・実践的側面が体系的に扱われることは稀です。

授業ではギターやドラムなどポピュラーミュージックで用いられる楽器に触れる機会はほとんどなく、理論的な学習も「ハ長調」「イ短調」といった日本独自の表記・用語にとどまっています。グローバルな音楽文化や英語教育の流れとは逆行する形で、音楽教育の言語や内容が伝統的な枠組みにとらわれている現状が浮き彫りとなっています。

部活動としての軽音楽部は徐々に市民権を得てきましたが、教育課程や指導要領にポピュラーミュージックへの深い理解を育む仕組みは整っていません。そのため、「軽」音楽という言葉が示すように、未だに軽視される傾向が根強く残り、教育的意義が正当に評価されることは少ないのが実情です。

さらに、部活動の地域移行が進む中、軽音楽部の指導を担う外部指導者の質も問われています。ロックやポップスは独学文化が強く、プレイヤーとしての経験はあっても、音楽の構造的理解や合奏指導ができる人材は限られています。指導者がポピュラーミュージックの教育的価値を理解していない場合、「バンドはエンタメ」といった表層的な印象が先行し、活動の中心が「楽しい思い出づくり」に終始してしまう恐れもあります。

もちろん、音楽を楽しむことは非常に重要な要素です。しかし、それだけではなく、軽音楽部を通して育まれるべき「社会性」「創造性」「協働性」といった学びを、いかに教育として位置づけるかが、今後の音楽教育における大きな課題となるでしょう。

やりたいことは「音楽」なはず

ロックやバンドがエンターテインメントであることに異論はありません。ただし、声を大にして伝えたいのは、それはあくまでも「音楽」という本質に対して、後から加えられたプラスアルファの要素だということです。軽音楽部という場で育んでほしいのは、自己表現や創造性であり、エンターテインメント性が必須だとは思いません。むしろ、それがなくてもロックやバンドは十分に楽しく、文化として、また青少年の健全な育成に寄与する活動になりうると考えています。

これは個人的な見解ですが、軽音楽部に入部する生徒の多くが、果たして本当にエンターテインメント性を求めているのか、疑問に思うことがあります。もし華やかな演出や観客の熱狂を求めているなら、彼らは学校外での音楽活動を選ぶのではないでしょうか。最近では、スポーツの世界でもプロ化が進み、試合前の演出やハーフタイムショーなど、観客を楽しませる工夫が見られます。プロの世界であればそれも1つの価値ですが、高校の部活動でスポーツをする生徒が、それを目標にしているとは思えません。彼らは競技そのものが好きだから続けているのです。

音楽に心を動かされた時、人は受け手にとどまるか、自ら演奏する側に回るかという選択肢を持ちます。軽音楽部に入部する生徒たちは、その選択をし、自ら音を鳴らしてみたいという思いを行動に移した人たちです。もちろん、ステージに立ち、拍手を浴びることに憧れる気持ちもあるでしょう。しかし、彼らが本当にやりたかったことの原点は、「音楽」であるはずです。

部活動は日々の活動の中に意義がある

例えば、「軽音楽部はエンターテインメント性があってこそ」「演奏会や大会はフェスのように華やかな方が楽しい」といった声があるかもしれません。確かに、そうした盛り上がりや特別感が、活動の魅力を引き立ててくれる場面もあると思います。しかし、それをすべて学校の先生方や関係者が担おうとすると、どうしても負担が大きくなってしまいます。部活動は、あくまで教育の一環です。日々の学びの中で大切にされるべき部分を、先生方がしっかりと見守ってくださるだけでも十分に意義あるものだと思います。

もし、演出やイベントのような特別な要素が必要な時は、民間と力を合わせることで、より具体的な形が築けるのではないでしょうか。役割を分かち合うことで、無理なく、より良い活動にする…。そんな在り方も、これからの部活動1つの形なのではないでしょうか。

軽音楽部の可能性

音楽的、人間的成長には「自己評価」だけではなく、他者への関心、査定、講評も大切

「他者の批評ができる力」を持つことが成長のカギ

辻　伸介
特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
副理事長

自分の良いところや改善すべきところを自分で判断できることも大事ですが、客観的な意見をもらうことや他者を批評する力を持つことも成長には欠かせません。部活動は、互いに演奏をチェックし合える絶好の環境です。部内で演奏を見せ合って批評し合ったり、大会などで他校や他県のバンドの演奏を見て研究する機会を作りましょう。

人の振り見て…

何かを体得していくためには「経験」が欠かせません。教科の学習も、できるだけ多くの「勉強」「試験」といった経験をした方がその内容がよく身につきます。音楽や楽器演奏も同様に、大事なのは「練習」「本番」といった経験ですが、部活動で行っていることに割ける時間は限られています。そこで重要となってくるのが、思考を内側だけではなく外側にも向けて周りをよく観察することです。

野球選手でもアイドルでも、誰か憧れの人ができると、その人のようになりたいと真似をし始めます。すべての習得は模倣から始まり、その探求への努力は苦労とは感じないため吸収力はグンと高まります。インターネットが発達した現代、簡単に古今東西の無数の音楽に触れることができますが、言い方を変えれば無料動画サイトやサブスクが当たり前の情報過多な状況です。メニューの多い飲食店のように、その中からお気に入りを探すのは簡単なことではありません。これぞ！という憧れの存在に出会えた人はラッキーともいえ、さらにその中から今風の言葉で「ハマる」「沼る」ほど夢中になれるアーティストやミュージシャンを見つけることは奇跡に近いかもしれません。

とはいえ、より多くの音楽や演奏に触れることは、見識を広める経験をする上でとても大事なことです。温故知新、知見を得ることこそ、直接的な練習の他に行うべき行動です。また、「他山の石」「人の振り見て我が振り直せ」ということわざのように、他者の行動から自分を振り返ったり、自分と誰かを比べて様々な感情持つことも、成長への良いきっかけとなります。

部内で相互講評をする

個人練習でもバンド練習でも、演奏している自分（あるいは自分たち）が本当は一番その良し悪しが見えていない場合もあります。自分たちの演奏を客観的に判断する最も簡単な方法は演奏を録音・録画してみることですが、聴き返してもミスばかりが気になって的確な改善点や伸ばすべき良いところに気づけないことも多いものです。

また、個人練習の方法はインターネットで見つけることができるかもしれませんが、アンサンブルに関して、さらに言えば今ここで演奏した自分たちへの適切なアドバイスがもらえることはありません。軽音楽部で客観的なチェックを行ってくれるのはコーチ（指導員）、あるいは学校によっては顧問の先生も良いアドバイザーになってくれるかもしれませんが、そういった指導者がいない学校ではクリニックや大会などに参加して外部の人から講評をもらうしかありません。しかし、そんな機会は稀です。

それらの問題を解決するために、一定の人数がいればどんな軽音楽部でもできる最も有効な手段が、部員同士で互いに批評したりアドバイスし合うことです。初めは先輩が後輩に…という形だけでも良いと思います。とにかく、互いの演奏を見せ合って意見交換する、感想を言い合う機会を作ることに大きなメリットがあります。

先輩が下級生の演奏を批評したりアドバイスすることは、自分が普段やっていることを見つめ直す良いきっかけになります。それに、そもそも先輩が後輩にアドバイスしてあげることは部活動の基本です。一方で、後輩が先輩のプレイを批評しようと一生懸命に観察することも、その後の成長につながります。どちらにしても、他者への批評が自分の耳を鍛え知識を増やしていくことになります。専門的なことがわからないという人でも、少なくとも自分のパートのことは互いに意見したり質問し合うことはできるのではないでしょうか。

批評ポイントはテクニック以外

批評のためにチェックすべきことは、初心者バンドでも上級生のハイレベルバンドでも実はあまり変わりません。技術的な批評を無理にする必要はなく、バンド演奏に対しての向き合い方やアンサンブル上の役割をそれぞれのパートがきちんと行えているかがメインです。ちなみに、それは大会においても重要な審査ポイントとなります。

そして、部活動としての規範が守られているかも大事なポイントです。演奏に臨む姿勢や態度、準備にかかる時間、セッティング、楽器＆機材の扱い方、挨拶、メンバー間の関係性…など、軽音楽部という部活動として、また集団行動としての責任感や社会性についてチェックし合うだけでもその意味は十分にあります。全国の学校の中には、大会や演奏会などに出演するバンドの選抜を部員同士の批評会で決めているという学校もあります。部員同士での決定であれば、選抜に遺恨も残りにくいのではないでしょうか。

それでも他者への批評などは言いづらい、気兼ねしてしまうという意見が多い場合は、無記名でコメント用紙を書き合って代表者が発表するといった方法もあります。初めは「感想を言い合う会」くらいのスタイルからでも、ぜひ取り入れてみて欲しいと思います。

大会は大きな学びのチャンス

現在、様々な軽音楽部向けの大会が各地で開催されています。大会は、練習の成果を発揮するための場としてだけではなく、考え方次第でさらに有意義なものとなります。出場するのは予選を勝ち進んできた優秀なバンドたちばかりで、しかも学内の演奏会とは違った緊張感がある真剣勝負です。そんなステージをよく観察することが何よりも大きな成長につながります。良いところは参考にし、反面教師として捉えるところは捉え、まさに「人の振り見て…」が実践できる場です。さらに、演奏したバンドへの審査員の講評と自分の感想との違いを比べてみたり、アドバイスを自分たちに置き換えて聞いて今後の参考にすることもできます。大会は、音楽的にも人間的にも大切な学びの場です。単なる優劣を競う場としてしまうのはもったいないことです。

初心者のうちは、他バンドの演奏を見たり聴いたりしても、テクニックばかりが気になってしまうかもしれませんが、本当に見て欲しいのは、各々が持つテクニックをどのようにしてアンサンブルに活かしているかという部分です。バンドというチームで演奏する時には「1人ではない」ことのメリットとデメリットがあります。当たり前だと思われるかもしれませんが、チームでの演奏やパフォーマンスは、メンバー同士で助け合い、おぎない合うことで「1＋1＝2」以上のものになります。しかし、その反面、複数人で合奏する難しさも同時についてま

わります。そういった部分の比較・分析ができ、言葉として感想や批評を言えるようになることが目標です。

大会での演奏のチェックポイント

普段の練習とライブ本番とでは、会場やステージの広さ、音響機材の仕様、共鳴、使用機材などの環境が違うため、演者にとってもいつもと同じような聴こえ方にはなりません。広いステージに慣れていれば予測して音作りを行っておくこともできますが、どちらにしても当日の微調整は必要です。普段からバンド全体のサウンドを意識していれば、どんな状況でもバランスの取れた演奏にすることができます。トータルで「良い音」かは最も大事なチェック項目です。他にも、例えばギターソロやキーボードリフなどを、セクションによって音色や音量のバランスを変えているかなどもアンサンブルにとって大事なポイントです。

ドラムとベースは「リズム隊」と呼ばれ合奏やグルーヴの土台となりますが、バンドのグルーヴはドラムとベースだけで作るものではありません。メンバーそれぞれが良いリズムで演奏できていることに加え、最終的にリズム隊によって作り出されているグルーヴの土台の上に他パートがどんなリズムで乗っているかがバンドの個性となります。各パートが自分のやることをしっかりと行いつつ、どこかで他のメンバーのことも常に感じていなければなりません。リズムアンサンブルについても、バンド演奏を批評する上で着目すべきポイントです。

また、合奏でもステージングでも「一体感」がキーワードです。メンバー全員が一丸となって世界を作り上げているかが重要です。一体感を出すには、普段の練習のうちからメンバー同士で良いチームワーク作りをしておかなくてはいけません。演奏する楽曲の歌詞を全員が理解し、どう感情的にダイナミクスをつけて演奏しているのか、表現しようとしていることは伝わったか、見た目やパフォーマンスにも一体感があったか、ボーカリストの表情や目線の位置、演奏中のアイコンタクト…などを含め、「全員」で演奏しているかがライブの最も大事なチェック項目です。

パートごとの批評ポイントの例

ボーカリスト
- 発声や滑舌は良く、歌詞が聴きやすいか
- 楽曲に合った強弱や抑揚か
- 他のパートとリズムやテンポ感
- 楽曲と合ったステージングや表情か
- 歌詞の世界観をイメージできているか
- マイクの使い方
- ピッチ（音程）の安定

ギタリスト
- 音量、音色は楽曲や演奏に対して適切か
- リズムはドラム、ベースと合っているか
- 歌のバッキング時とソロ時などの切り替え
- 他の楽器との音のマッチング
- チューニング
- スムーズな機材セッティングだったか
- ソロなどのステージングは考えられていたか

ベーシスト
- バンドに馴染むベースらしい音作りか
- ドラムとのグルーヴの相性
- ベースラインの作り方や理解
- コードの和音構成や調性の理解
- スムーズな機材セッティングだったか
- チューニング

ドラマー
- テンポの安定
- アレンジに合ったダイナミクスだったか
- 楽曲に合ったグルーヴだったか
- 楽曲に合ったサウンド（主にスネア）か
- リズムパターンとフィルインのバランス
- セッティングは迅速だったか

キーボーディスト
- バッキングのリズムは良かったか
- ボーカルをよく聴いて感情表現していたか
- 音量、音色は楽曲や演奏に対して適切か
- 音色チェンジはスムーズか
- 演奏のための事前「仕込み」は十分だったか
- スムーズな機材セッティングだったか

その他
- コーラス
- 表現力
- 演奏のし始めと終わり方

大会の動画を見る

部活動で最も大事なのは、チャレンジすることとそのプロセスです。大会やコンテストは貴重な経験の場となります。機会があれば結果を恐れずどんどんエントリーして欲しいと思います。また、自分は出場しなくても、先輩や同級生、他校他県のバンドを見に可能な限り会場に足を運んでもらいたいです。百聞は一見に如かず。批評する力をつけるには、自分の目と耳で体感することほど近道はありません。

軽音楽部は、まだマスコミに取り上げられることも少なく、大会の現状や出演する高校生の活躍や気持ちを知る機会は多くありません。当協会が主催する大会では、YouTubeで全バンドの演奏動画を閲覧することができます。録画は、会場の熱気そのままに…というわけにはいきませんが、学べることはたくさんあると思います。全体ミーティングで動画を全員で見て、感想を言い合うといった会を開いても有効だと思います。

一膳の割箸から考える 日本の林業と国土の未来

石川県の林業について
石川県山林協会
専務理事　坂口浩一郎

伐採、植樹する林業企業
株式会社白峰産業
専務取締役　尾田弘好

一膳の割箸から考える林業
株式会社未常識
代表取締役　三谷佳之

主催大会レポート

競わないコンテストを目指して…。芸術文化活動の1つである「軽音楽」におけるコンテストの意義とは

軽音楽部における夏の大会を振り返って

三谷佳之
特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
理事長

公式大会／民間大会を問わず、「軽音楽部」を対象にしたコンテストが全国各地で開催されています。その数はコロナ禍をキッカケに増えた感がありますが、「音楽」は芸術文化活動の1つであり、本来は点数がつけられるものではありません。しかし、日頃の目標を見据え、励みにするためには「順位づけ」が必要であることにも一理あります。今回は「高等学校軽音楽コンテスト関東大会／中部大会／関西大会」という都府県の枠を越えたブロック大会を主催している当協会の方針を述べさせていただきます。

お互いに讃える文化交流の場

「芸術文化活動」の1つである音楽、とりわけ「軽音楽部」のライブ演奏に優劣、または点数をつけるという部分に違和感がありつつ、「部活動としての目標（機会）を生徒たちに与える」という大義のもと、今夏もコンテストの時期を迎えました。

マズローの欲求5段階説に従えば、「順列を決める」ということは、欲求説の4番目…「承認欲求」ではないかと考えています。そもそも音楽や芸術というのは、その一段上の「自己実現欲求」に値するのではないかと考えると、仲間とともに楽曲を作り上げ、それを聴衆の前で披露し、聴いている人たちに感動を与える…という軽音楽部の活動に優劣をつけることはナンセンスではないでしょうか。

そういう意味で、お互いに競うことに重点を置かず、お互いを讃え合い、評価し合い、そして、交流するという文化活動の一環としての他流試合ならぬ、いわば「異文化交流」を目指すべきではないか、と常々考えています。音楽や芸術に「上下」はなく、そもそもが「好きか、嫌いか」なのです。いかに高校生の人格形成や教養を深める一助になるか、世間一般の方々に現在の軽音楽部の様子を見ていただけるかを考え、取り組んでいます。

他者の演奏から教養を高める

音楽や芸術に「鑑賞」という表現があるように、評価する目や耳を養うことは「教養」につながると考えています。高等学校の「軽音楽コンテスト」においては、多くの楽曲や演奏が目の前で繰り広げられるので、「（自分自身で）評価する基準を持つ」という機会としては、格好のチャンスです。その際、当協会のコンテストでは、その道の専門家である審査員が「（演奏後に）講評する」という形式を採用しており、ともすると、独りよがりになってしまう評価基準の「ガイドライン」になるようにしています。

軽音楽文化祭 国際大会の開催

今夏の軽音楽コンテストに関しては、昨年度からの試みとして、各ブロック大会の上位入賞校を招いて、「高等学校軽音楽文化祭 国際大会」を開催しました。この大会では優劣をつけず、「文化交流」という面を意識していたので、大会名も「高等学校軽音楽文化祭 国際大会」と命名しました。この名前に込められた「競わない大会」のコンセプトが、これからも継続的に発展していくことに期待しています。各大会の様子は後続のページをご覧ください。

令和7年度

第6回 高等学校軽音楽コンテスト関東大会

令和７年７月３１日（木）青葉公会堂
主催：特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会／公益財団法人かけはし芸術文化振興財団
後援：文化庁　特別協賛：日本工学院専門学校／日本工学院八王子専門学校／専門学校東京ビジュアルアーツ・アカデミー／ギブソン・ブランズ・ジャパン株式会社

夏休みに入り、日々の練習や各種大会に向けて、熱が入る7月下旬。7回目となる「高等学校軽音楽コンテスト関東大会」を横浜市にある青葉公会堂で開催しました。当日は動画予選やライブ予選を通過した18校／22バンドが出場。オリジナル／コピーを問わず、各バンドが練習の成果をステージで存分に発揮しました。

主催者を代表して、当協会の三谷理事長が開会式に登壇。「東京都や神奈川県、千葉県や埼玉県をはじめ、関東地方の高等学校軽音楽部の目標になるようなコンテストを作ろう！ということで始めた高等学校軽音楽コンテスト関東大会ですが、今年の夏で7回目の開催を迎えることができました。顧問の先生や関係者の方々にご協力をいただき、無事に大会が開催できることを嬉しく思います。今日は日頃の練習の成果を存分に発揮する日です。ぜひ頑張っていただきたいですし、各地の高校生バンドの演奏を聴くことができる場ですので、『楽しかった！』という感想だけでなく、いろいろなバンドから学び、たくさんのことを吸収してもらいたいと思います。コンテストですので、順位はついてしまいますが、結果に一喜一憂せず、これからも頑張ってください。大切なのは普段通りの演奏をステージで披露することができたか、です」と述べました。

審査員やコメンテーターが紹介されると、1バンド目の東京学館船橋高等学校の「Riots for peace」の演奏からスタート。演奏後には、審査員から「楽曲も歌詞も、アレンジもコーラスも、どれもかっこ良かったです。ロックテイストが散りばめられており、統一感もありました。ギターソロやドラムのビート感も聴かせどころで、心地良かったです。もう少し滑舌良く発声して、マイクに声を届けられると、もっと歌詞が伝わるようになるので、ぜひ研究してみてください」といったアドバイスが送られ、出場バンドはもちろん、聴衆も参考にしました。

結果報告

グランプリ	中央大学杉並高等学校／ nēolull
準グランプリ	神奈川県立市ケ尾高等学校／ 404
第３位	中央大学杉並高等学校／ Myris
奨励賞	相模女子大学高等部／ coconuts
奨励賞	中央大学杉並高等学校／ poppin sugar
奨励賞	神奈川県立藤沢総合高等学校／ Mume! 少女

東京学館船橋高等学校／ Riots for peace
高崎商科大学附属高等学校／ Sense of wonder
東海大学付属浦安高等学校／「ソネット」
東京都立鷺宮高等学校／ Act.
茨城県立牛久高等学校／雨懋
明星高等学校／軟式ゴルフ 46
日本大学明誠高等学校／ギンモクセイ。
栃木県立足利南高等学校／ Plum berry
神奈川県立藤沢総合高等学校／ No.2
埼玉県立熊谷西高等学校／ Eeliaas
青山学院横浜英和高等学校／ Symmetry
東京都立向丘高等学校／楽異説
千葉県立東葛飾高等学校／ Penta Heimer
国際学院高等学校／ feeling of leaking
本庄東高等学校／ Triangirl’S
神奈川県立市ケ尾高等学校／ lit24/7

次回：令和８年３月下旬（予定）

令和7年度

第12回 高等学校軽音楽コンテスト中部大会

令和７年７月29日（火）名古屋文理大学文化フォーラム（中ホール）
主催：特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会／公益財団法人かげはし芸術文化振興財団　後援：文化庁・愛知県高等学校文化連盟・愛知県教育委員会・静岡県教育委員会・岐阜県教育委員会・三重県教育委員会・富山県教育委員会　特別協賛：専門学校名古屋ビジュアルアーツ・アカデミー

グランプリ受賞
金城学院高等学校／白壁ガールズ

２０１９年の第１回大会より、今夏で「12回目」の開催を迎えた「高等学校軽音楽コンテスト中部大会」。春に引き続き、愛知県稲沢市にある、名古屋文理大学文化フォーラムの中ホールで開催しました。当日は、予選の動画審査を通過した16校／22バンドが出場。愛知県をはじめ、岐阜県、静岡県、三重県、富山県の代表バンドが日頃の練習の成果をステージで存分に発揮しました。

開会にあたり、主催者を代表して当協会の三谷理事長が開会式に登壇。「東海地方や中部地方、北陸地方の高等学校軽音楽部の目標になるようなコンテストを作ろう！ということで始めた高等学校軽音楽コンテスト中部大会も、今回で12回目の開催を迎えることができました。今日はコンテストなので、順位はつきますが、結果に一喜一憂せず、これからも頑張ってください。そして、各地の高校生バンドの演奏を聴くことができる場ですので、いろいろなバンドから学び、たくさんのことを吸収してもらいたいと思います」と述べました。

審査員が紹介されると、早速、１バンド目の静岡県立浜松北高等学校の「Set V!!」の演奏からスタート。演奏後には、審査員から「オリジナル曲の披露でしたが、構成がとてもわかりやすく、馴染みやすい楽曲で楽しめました。ギターやベースのバランスを考えた音作りや各セクションの入口をしっかりと合わせるなど、『バンド力』が上がると、さらに良くなると思いますので、これからも頑張ってください」という講評や今後に向けたアドバイスが送られました。

厳正な審査のもと、今夏は金城学院高等学校の「白壁ガールズ」がグランプリを受賞。閉会式での総評では、当協会の辻 副理事長より「今日は、いろいろなバンドの演奏を聴いたと思うので、（出場した）自分たちのことを激励しつつ、他校の良いところを取り入れて、明日からの活動に励んでください」と述べ、大会を締めくくりました。

結果報告

グランプリ	金城学院高等学校／白壁ガールズ
準グランプリ	名古屋経済大学市邨高等学校／なずな
第３位	愛知県立旭丘高等学校／ PolaRizz
奨励賞	清水国際高等学校／ある∞に。
奨励賞	名古屋経済大学市邨高等学校／すいれん
奨励賞	東邦高等学校／まいのり

静岡県立浜松北高等学校／ Set V!!
金城学院高等学校／ mer calme
愛知県立半田高等学校／ Contrast
名古屋市立緑高等学校／まいべーすめーかー
名古屋市立緑高等学校／ NoN spare
三重県立四日市商業高等学校／ brilliant
名古屋国際高等学校／春蘭
浜松修学舎高等学校／－２７３℃
岐阜県立斐太高等学校／ぱぺっと。
高岡第一高等学校／ KLEINOD
清水国際高等学校／ INSPIRE
愛知県立瑞陵高等学校／ HEX age IN!!
高岡第一高等学校／ウルマリ
愛知県立一宮興道高等学校／ナミダグモ
三重県立四日市商業高等学校／春風

次回：令和８年３月30日（月）開催
名古屋文理大学文化フォーラム（稲沢市民会館）

令和7年度

第10回 高等学校軽音楽コンテスト関西大会

令和７年７月27日（日）舞鶴市総合文化会館（大ホール）
主催：特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会／公益財団法人かげはし芸術文化振興財団　共催：舞鶴市　協力：舞鶴ミュージックコミッション
後援：文化庁・舞鶴市教育委員会・京都府教育委員会・兵庫県教育委員会・和歌山県教育委員会・滋賀県教育委員会・福井県教育委員会・富山県教育委員会

グランプリ
大谷高等学校／ Nodays

関西大会は夏と春の年２回実施しており、春は宇治市にて、夏は同じく京都府の舞鶴市で開催しています。２０１９年から舞鶴市との共催でスタートした夏の大会ですが、今年度で10回目（舞鶴市では７回目）の節目を迎えることができました。今夏も京都府をはじめ、大阪府、兵庫県、和歌山県、滋賀県、福井県、富山県から動画審査やライブ予選を通過した15校／20バンドが出場し、応援の軽音楽部員や保護者、舞鶴市民の方々など、たくさんの観客の前で、どのバンドも日頃の練習の成果を発揮しました。

開会に先立ち、当協会の三谷理事長が登壇。「音楽は本来、優劣をつけるものではありませんが、今日は存分にステージで演奏してください。そして、活動を通して、コミュニケーション、チームワーク、クリエイティビティを学び、大会を目指して頑張ってきたことは、社会に出た時に、きっと皆さんの役に立つことでしょう」と、部活動の意義を述べました。

続いて、舞鶴市の福田副市長からも歓迎の挨拶をいただき、「ようこそ舞鶴にお越しくださいました。舞鶴市は豊かな自然に恵まれた美しいまちです。舞鶴湾のリアス式海岸をはじめ、赤れんがパークや五老ヶ岳公園の展望タワー、豊かな海産物など、魅力がいっぱいです。ぜひ大会後は時間の許す限り、舞鶴の魅力にたくさん触れていただきたいと思います。そして、今日は日頃の練習の成果を遺憾なく発揮され、本大会が実りあるものになることを期待しています」と、大会の発展と出場者へのエールを送られました。

関西大会をはじめ、当協会の中部大会や関東大会などの「ブロック大会」では、普段交流がない学校の演奏を聴いたり、府県の特徴の違いを感じることができます。生徒たちは他校の演奏や審査員のアドバイスに耳を傾け、演奏後に盛大な拍手を送りました。

結果報告

グランプリ	大谷高等学校／ Nodays
準グランプリ	大谷高等学校／コンタクト
第３位	大谷高等学校／ PANDEMIC
舞鶴市長賞	兵庫県立東播磨高等学校／ Not by choice
奨励賞	兵庫県立兵庫高等学校／ You'll seek art
奨励賞	和歌山県立笠田高等学校／フラット
奨励賞	大阪府立大阪ビジネスフロンティア高等学校／キャンディーボックス

大阪府立鶴見商業高等学校／山本組
大阪府立槻の木高等学校／今宵ノカナタ
滋賀県立大津高等学校／天晴れ惨敗
大阪府立旭高等学校／ Morning_glory
滋賀県立大津高等学校ノンシュガー
和歌山信愛高等学校／ Sound Eater
大阪学院大学高等学校／ NoVA-LuNA
高岡第一高等学校／ Neo one
高岡第一高等学校／ちゃづけ
京都府立峰山高等学校／ SHARUM
福井県立若狭高等学校／ chasing sound
兵庫県立西脇高等学校／金木犀
福井県立若狭高等学校／アマリリス

次回：令和８年３月38日（土）開催
宇治市文化センター（大ホール）

日本工学院専門学校／日本工学院八王子専門学校

「やってみる！」という気持ちが大切です

音楽やエンターテイメントにまつわる職業や業界は多岐に渡りますが、どんな世界なのでしょうか。今回はライブPAの仕事について、日本工学院専門学校／ミュージックカレッジ コンサート・イベント科の小峰先生に伺いました。

ー ライブ PA の仕事について教えてください

小峰：大型音楽フェスティバルや単独公演など、ライブのスタイルや規模によってさまざまな場合がありますが、一般的には出演するアーティスト、またはバンドメンバーとの打ち合わせや会場の下見などからライブ PA の仕事が始まります。

その後、演奏する曲やバンド構成などの事前情報を基に、使用するマイクの種類やスピーカーの数を検討し、「音響プラン」を作成します。ライブ当日は大道具や特殊効果、照明や電飾など、他のセクションの方々と一緒に作業をするため、全体のタイムテーブル（タイムスケジュール）に沿って、安全第一を意識しながら PA 機材を仕込みます。

機材の仕込み作業が落ち着いたら、バンドメンバーと一緒に楽器や声といった音の調整となるサウンドチェックやリハーサルなどを行い、聴きやすく、かつライブ感（迫力など）がある音に整え、ライブサウンドを作り上げます。

ライブ終了後は機材の撤収です。マイクやスピーカー、スタンド類を片付けて、トラックへ積み込み、次回の公演に備えます。

ー ライブ PA に携わりたいと考えた場合、入学前に、ある程度の知識が必要ですか。高校時代にやっておいた方が良いことがあれば、教えてください

小峰：放送部や吹奏楽部、軽音楽部など、顧問の先生や先輩から教わった知識を活かすことも可能です。しかし、入学前に知識や経験がなくても、日本工学院では「0（ゼロ）」の状態からしっかりと学ぶことができるので、安心してください。

強いて言うとすると、入学前までに、たくさんのライブを見て欲しいですね。最近では、インターネット動画配信でも見ることができますが、可能であれば生のライブを見て、楽しんで欲しいと思います。また、ライブのみならず、ミュージカルや映画、絵画や小説など、さまざまな芸術作品にも触れて欲しいですね。

そこには、作者が伝えたいメッセージや作者の感情があります。それを自分なりに受け取って、お客様の視点のみならず、制作者（スタッフ）からの視点でも感じてみてください。その感覚と経験から「自分の感性」をこれから先もずっと磨いていって欲しいと思います。

ー ライブ PA の仕事の楽しいところや、やりがいを感じる瞬間を教えてください

小峰：「音」は目に見えないので、整えたライブサウンドをバンドメンバーと共感でき、心が通じ合えた瞬間は嬉しいものです。そして、何よりもライブ会場に来ていただいたお客様が思いっきり楽しんでいる、そんな幸せな時間を共有できた時などにやりがいを感じます。

一方で、これは私の感想になりますが、この仕事がとても楽しいので、大変に感じる時はありません。ひと昔前までは、かなり重い機材が数多くありましたが、最近は軽量化が進み、運搬なども楽になりました。

ー ライブ PA の仕事は、どんな人におすすめですか？

小峰：いろいろな人におすすめしたい仕事ですが、コンサートやライブが好きな人。機材を組み上げたり、ケーブルをつなぐなど、機材に触れるのが好きな人が向いていると思います。また、１つの物事に没頭しやすい人。アーティストや周りのスタッフとのコミュニケーションが欠かせず、連携が大切になるので、「人のことが好きな人」におすすめです。

また、音楽産業の中でも「コンサート・イベント産業（ライブ市場）」は、とても勢いのある産業の１つです。日本人アーティストのほか、K-POP をはじめ、海外アーティストの来日公演やドームクラスのコンサートも増えてきています。最近では、2.5 次元ミュージカルやイマージブ（没入型）イベントなど、新しいスタイルのイベントも数多く開催されています。音響機材も日々新しくなり、今でも自己研鑽を積んでいます。難しさや大変さよりも、新しいことへの「ワクワク」の気持ちが大きいです。そんな方におすすめな仕事だと思います。

ー ライブ PA の仕事を続けるのに大切なことは何でしょうか。３つほど教えてください

小峰：１つ目は、どんなことにも興味を持って、「やってみる！」と思う気持ちです。

２つ目は、ライブ PA というのは、自分だけではできない仕事です。お客様や周りのスタッフからお仕事をいただいている「おかげさま」の気持ちが大切だと思います。

３つ目は、「日々感謝」の気持ちです。これはライブ PA の仕事に限ったことではないと思いますが、周りの人たちに感謝をしながら、円滑なコミュニケーションで仕事に従事することで、その仕事のことをますます好きになり、結果的に仕事を長く続けることができると思います。こういった気持ちで日々を過ごして欲しいですね。

▲ PA スタッフと連携して、スピーカーを組み上げています

東京・名古屋・大阪・福岡から世界へ!

エンタメ&クリエイティブの専門学校

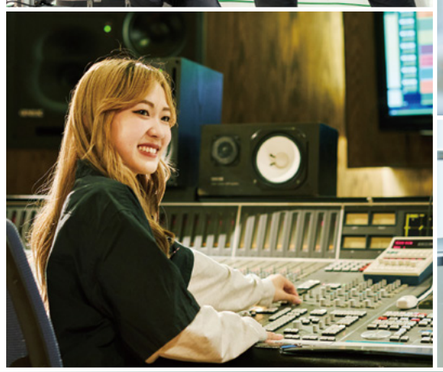
VISUAL ARTS

東京 / 名古屋 / 大阪 / 福岡

ビジュアルアーツ・アカデミー

ACADEMY

Akademeia 21st Century



ミュージシャン
声優・俳優・タレント
ダンス・ダンスボーカル
ネットタレント・インフルエンサー
映像クリエイター(3DCG・VFX)
テレビ放送・映画スタッフ
コンサート・舞台スタッフ
レコーディングエンジニア
サウンドクリエイター
映像音響(MAエンジニア)
写真・デザイン
マスコミ出版
芸能マネージャー
特殊メイク

※地区によって教育分野が異なります

大学も専門学校も超える新たな学びの場

21世紀アカデメイア
Akademeia 21st Century

専門学校 東京ビジュアルアーツ・アカデミー
(2024年4月 専門学校 東京ビジュアルアーツより校名変更)

専門学校 名古屋ビジュアルアーツ・アカデミー
(2024年4月 名古屋ビジュアルアーツより校名変更)

専門学校 大阪ビジュアルアーツ・アカデミー
(2024年4月 ビジュアルアーツ専門学校より校名変更)

専門学校 福岡ビジュアルアーツ・アカデミー
(2024年4月 専門学校 九州ビジュアルアーツより校名変更)

専門学校大阪ビジュアルアーツ・アカデミー

たくさんの「ワクワク」を感じられます

音楽やエンターテイメントにまつわる職業や業界は多岐に渡りますが、一体どんな世界なのでしょうか。今回は「ライブ撮影」にまつわる映像の仕事について、専門学校大阪ビジュアルアーツ・アカデミー／放送・映画学科の福島先生に伺いました。

ー「ライブ撮影」にまつわる仕事について、職種や内容を教えてください

福島：映像の仕事は、大きく３つに分けることができます。

① 映像の構成や演出を考えるディレクターで、業界では「制作」という名で呼んでいます。
② カメラや音声、照明などの「技術」です。
③ 映像素材をつなげたり、音声を整えたり、テロップをつけたりする「編集」の仕事です。

このように、制作・技術・編集の３分野のプロが協力し合っています。

また、これらの分野の中にもそれぞれの専門職がいます。例えば、ライブ撮影の技術では、複数台のカメラを用いて撮影するので、カメラの台数分の「カメラマン」が必要ですし、それぞれのカメラの映像を切り替える「スイッチャー」という仕事もあります。また、カメラマンやスイッチャーに次の演目の流れをインカムで教える「指示出し」という仕事があったり、会場での音を作る音響さんとは別に、映像用の音を手がける「音声」という仕事があったり…マニアックなところでは、カメラの明るさや色味を調整する「ビデオエンジニア」やクレーンカメラなどの「特機」を扱う仕事など、たくさんの仕事があり、細かく分業化されているのが映像業界の特徴とも言えます。

ー 入学前に、ある程度の知識は必要ですか。高校時代にやっておいた方が良いことも教えてください

福島：映像の仕事は相手のことを知っていないと、撮ることができないんです…。なので、経験は何でも役に立ちます！例えば、楽器が弾ければ音楽モノが得意になるし、野球のルールを知っていれば、野球中継だって撮ることができます。何にでも興味を持てれば、映像の仕事をやっていけると思います。

近年は、いろいろな映像を無料で手軽にスマホで見ることもできますよね。ミュージックビデオや音楽番組、ドキュメンタリー、映画など、とにかくたくさんの上質な映像に触れてもらい、自分の「引き出し」を増やすことが高校時代でもできることだと思います。

ー お仕事の楽しいところや、やりがいを感じる瞬間を教えてください

福島：たくさんあるのですが、常にワクワクすることができるのが楽しいところだと思います。仕事上の特権ですが、一般的には入れないエリア…例えば、最前列のお客さんよりも近い場所から撮影をしたり、肉眼で見るよりも大きくズームで寄って撮れるなど、仕事を通じて、たくさんの「ワクワク」を感じることができるのは、この業界ならではだと思います。

また、かっこ良く撮れていたり、曲にハマった時など、自信のある映像をたくさんの人に見てもらい、感動してもらえていると、楽しさだったり、やりがいを感じます。

ー 一方で、大変な点はどんなところが挙げられますか？

福島：「生モノ」を撮ることが多いので、「失敗してしまったので、もう一度やり直しさせてください…」というのが利かない点が大変ですね。ミスらないようにではなく、成功するために撮影の練習をしたり、機材の準備を入念に行ったり、アーティストの楽曲を研究してから現場入りするのですが、撮影が終わって現場を離れるまでは（いろいろな意味で）ドキドキしながら仕事を進めています。

ー この仕事を続けるのに大切なことは何でしょうか。３つほど教えてください

福島：１つ目は、映像の世界に限ったことではないと思いますが、「挨拶」です。様々な人たちが携わっているので、「はじめましての方」と一緒に仕事をすることも多くなります。出会って「おはようございます！」という挨拶からチームワークを作っていけると、気持ちの良い現場を作れますね。

２つ目は、視野を広く持つことです。何にでも興味を持って、「面白い！」という部分を発見できる力が大事です。カメラで撮影しても、ギタリストの手元ばかりを撮っていた…ということにもなりかねません。「ギタリストが良い表情をしてる！顔が映る画角で魅せたい！」というアイデアと周りを広く見渡せる力が大切です。

３つ目は、「楽しむ」という気持ちです。拘束時間は長くなるし、暑いし、寒いし、雨は降るし…それだけで、普通ならテンションが下がりますよね（笑）。反対に、そこを楽しんでいくような気持ちがあれば、仕事を長く続けていくことができるはずです。お客さん（視聴者）はもちろんのことですが、演者さん・スタッフさんなどの関係者も楽しませるためには、まずは「自分が楽しまなければいけないよね！」と、学生たちに伝えています。

▲映像のスイッチングもライブ撮影の醍醐味の１つです